

島根県益田市。時間がゆったりと流れる静かな町に、一年前、ウルトラモダンな施設が建った。

グラントワ。島根県立石見美術館といわみ芸術劇場が一体になった芸術文化センターで、中央には45層四方の水をたたえる中庭があり、屋根や外壁には28万枚もの石

島根で興奮モノお披露目

州瓦が用いられる。瓦の壁は、太陽の光と空の色を映しこみ、メタリックに光ったり七色に華やいたりと、刻々と表情を変える。

内藤廣さん設計による建築も庄巻ならば、収集方針のひとつをフアッションにしたという美術館の心意気も驚きである。現在、おそろく国内では初のスポーツウエア

展を開催中。主任学芸員の南目美輝さんにお話をうかがう。なぜフアッションを主軸のひとつに？

「森英恵さんのご出身が益田の近くだったことがあります。後発の美術館として、他館との差異化をはかるため、フアッションに力を入れることにしました」

でも、フアッションに関心の高い人が少ないとおぼしき場所です。フアッション展をおこなうって、どうなんでしょう、反応などは？

「もともと美術館すらなかった場所です。お客さまにとってはまず美術館に行くことじたいが珍しい体験です。現代美術だろうがフアッションだろうが、なんでも初体

コロモのココロ

中野香織の

験。だから逆に、なんの偏見も構えもなく、すっと入って、面白がっていらっしやいます」

実は今回お披露目のスポーツウエアには、服飾史的に見て興奮モノが何点もあるのだ。たとえば1910年代の女性用サイクリングスーツ。自転車に乗るときには幅広キュロットになり、降りたときにはボタンの留め変えでロングスカートに見せる仕掛けが施されている。時代のモラルと女性の要請との妥協点を見いだそうとした、名もなきテーラーの工夫がしのばれる逸品。オートクチュールを中心に集めるべき美術館ではないからこそその収集成果ともいえる。

そんなお宝も、お宝として見るのではなく、純粹に面白がる。贅沢で、前衛的です。(服飾史家)